

伊吹町文化財調査報告書第10集

すぎさわいせきかめかんぼ
杉沢遺跡甕棺墓の調査
たに かい どう い せき
谷 海 道 遺 跡

—伊吹町内遺跡発掘調査Ⅲ—

1996.3

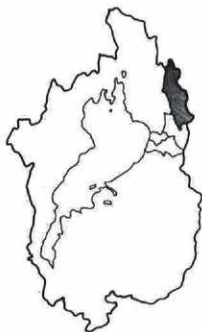
滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書第10集

すぎさわいせきかめかんぼ
杉沢遺跡甕棺墓の調査

たに かい どう い せき
谷 海 道 遺 跡

—伊吹町内遺跡発掘調査Ⅲ—



1996.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

昭和13年、坂田郡内で初めての発掘調査がおこなわれました。

杉沢地区では、古くから樋口元先生をはじめ地元の方々の手で地域の遺跡の研究が進められ、各種の石器の出土が報告されていました。発掘調査の結果、縄文時代の終わり頃の「合口甕棺」が2組出土し、縄文時代晩期を代表する遺跡として考古学史に名を残すことになりました。

今回、耕作中に1組の合口甕棺が出土しました。発見者の西堀慶治郎氏は、鍬で取り上げてしまわれた土器片を、1つ残らずビニール袋に入れられ、土中の土器はそのままにされて、町史編さん室と教育委員会に連絡をして下さいました。

この適切な処理のお陰で、約57年ぶりに「杉沢遺跡の合口甕棺」を調査することができました。今回の調査は、ひとえに西堀氏が遺跡への関心が高い方であったために実現したものです。また、調査中には、多くの区民の方にさまざまなアドバイスをいただきました。明治末年、1点の石斧発見から、今日まで脈々と受け継がれてきたふるさとの遺跡への熱き思いが伝わってきます。

遺跡は、祖先が私達に残してくれた貴重な文化遺産です。

谷海道遺跡は、村木地区の歩みを解明する上で重要な場所であると伝えられてきました。今回の確認調査は、決して充分なものではありませんが、古くからの言い伝えを実証するものです。

最後になりましたが、調査を実施するにあたりご理解ご協力を賜りました土地所有者や地元の方々はもちろん、指導・助言をいただきました諸氏をはじめ、現地調査や整理作業に従事して下さいました作業員の方々にも、末文ながら深く感謝の意を表わす次第であります。

1996年3月

伊吹町教育委員会

教育長 石河竹二郎

例 言

1. 本書は、文化庁・滋賀県の補助を受け、平成6・7年度国庫補助事業として実施した、滋賀県坂田郡伊吹町大字杉沢に所在する杉沢遺跡ならびに、伊吹町大字村木に所在する谷海道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受けて、伊吹町教育委員会が主体となって実施した。現地調査は平成6年度におこない、平成7年度に整理調査を実施した。
3. 現地調査は伊吹町教育委員会生涯学習課技師・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記のとおりである。

調査主体 伊吹町教育委員会 教育長 石河竹二郎

調査事務局 伊吹町教育委員会 生涯学習課

調査作業員 小川山貴枝 高橋元子（杉沢遺跡）

川瀬春益 日時義夫 稲崎真澄 西村 進 瀧澤康仁
的場誠司 山田 卓 田中秀人（谷海道遺跡）

4. 遺物の整理・実測に関しては、上記作業員のうち小川、高橋、瀧澤、的場、山田、田中でおこなった。
5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言等種々の協力を得た。記して深く感謝の意を表す次第である。

西堀慶治郎 田中敬吉 藤田和彦 福永川澄 泉 拓良 中村健二

中井 均 土井一行 桂田峰男 宮崎幹也 (敬称略)

6. 出土遺物の写真撮影については寿福写房（寿福滋氏）をお願いした。
7. 遺物の番号は、本文中・挿図・図版ともに対応する。
8. 本書の執筆、編集は高橋順之がおこなった。

本文目次

| | |
|----------------------|---|
| 第1章 杉沢遺跡甕棺墓の調査 | 1 |
| 1 遺跡の性格 | |
| 2 調査の経過 | |
| 3 調査の結果 | |
| 4 杉沢遺跡出土の甕棺（まとめにかえて） | |
| 第2章 谷海道遺跡の調査 | 9 |
| 1 遺跡の性格 | |
| 2 調査の経過 | |
| 3 調査の結果 | |
| 4 まとめにかえて | |
| 資料紹介 天野川採集の石斧 | |

表目次

| | |
|---------------|---|
| 表1 杉沢遺跡出土甕棺一覧 | 4 |
|---------------|---|

挿図目次

| | |
|---------------|---|
| 第1図 遺跡位置図 | 1 |
| 杉沢遺跡 | |
| 第2図 甕棺出土状況実測図 | 3 |
| 第3図 出土遺物 | 7 |

| | | |
|-------|------------|----|
| 第4図 | 昭和13年出土の甕棺 | 7 |
| 第5図 | 甕棺出土分布図 | 8 |
| 谷海道遺跡 | | |
| 第6図 | 調査地位置図 | 9 |
| 第7図 | 出土遺物 | 11 |
| 第8図 | 石斧実測図 | 12 |

写 真 目 次

| | | |
|-----|-------------|---|
| 写真1 | 昭和13年甕棺出土状況 | 8 |
| 写真2 | 昭和29年甕棺出土状況 | 8 |
| 写真3 | 昭和29年出土した土器 | 8 |
| 写真4 | 昭和29年出土した土器 | 8 |

図 版 目 次

杉沢遺跡

図版1 上：調査地風景 下：調査風景

図版2 甕棺出土状況

図版3 上：甕棺出土状況 下：出土遺物

谷海道遺跡

図版4 上：調査地遠景 下：調査地より伊吹山を望む

図版5 上：調査風景 下：トレンチ1

図版6 上：トレンチ2 下：トレンチ3

図版7 上：出土遺物 下：採集石斧

第1章 杉沢遺跡甕棺墓の調査

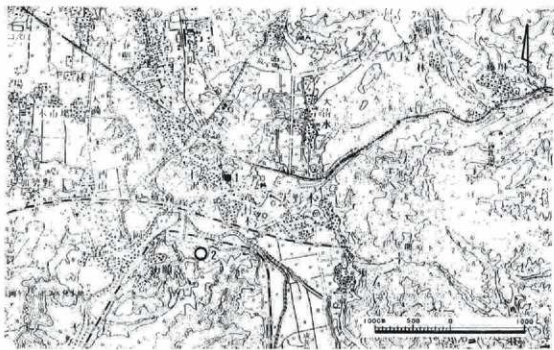
1. 遺跡の性格

滋賀県坂田郡伊吹町は、近江盆地の北東縁部、滋賀県と岐阜県の県境として南北に連なる伊吹山地の西に位置している。東西7km、南北22.7km、総面積109.17km²の町域を有し、西は浅井町、南は山東町、東は岐阜県で、北から坂内村、春日村、関ヶ原町に接している。

杉沢遺跡のある杉沢地区は、町域南部、伊吹山南麓の弥高川と政所川によってつくられた扇状地扇端に位置している。

明治44年、勝居神社近辺での磨製石斧発見を契機として、その後多くの土器や石器が採集されている。特に、石器類は磨製石斧を筆頭に、石鏃、石錘、石皿、たたき石、凹石、磨り石、砥石、玉、石棒、石刀、石剣、多頭石斧、御物石器などがみられる。昭和13年に京都大学小林行雄氏らにより発掘調査がおこなわれ、縄文時代晩期後半の合口甕棺2基が出土した。⁽¹⁾昭和63年には、ほ場整備事業に伴う発掘調査がおこなわれ、縄文時代晩期前半の土器が一括して出土した。⁽²⁾平成3年の範囲確認調査では、遺跡の東へ広がり、平安時代の遺構面の存在を確認した。⁽³⁾

しかし、現在までの調査では、合口甕棺をもつ墓域に伴う住居跡等の遺構は確認されていない。



第1図 遺跡位置図 (1. 杉沢遺跡甕棺出土地点 2. 谷海道遺跡)

2. 調査の経過

今回、柿畑で長さ約7m、幅約1m、深さ約20cmの穴を掘削中に多量の縄文土器片が一括して出土した。掘削は更に深くおこなわれるため、遺構の性格を解明するための調査として緊急におこなった。

調査期間は平成7年1月10日～12日と17・18日である。16日に現地説明会をおこなった。

調査地は、県道山東本巣線の東側の柿畑で、昭和13年の甕棺出土地点から約20m東にあたる。ここを東端にして、南北約120m、東西約100mの範囲内で、今回のものを含めて9基の甕棺が発見されているようである。標高は約161mをはかる。

調査は、周辺が耕作中の畑地であった関係から、土器の埋設状況のみを確認する目的でおこなった。土器が集中して出土した個所を中心に1.5m四方の調査区を設け、人力によって掘り下げながら遺構、遺物の状況を確認したあと、写真撮影と平面図の作成等をおこなった。

3. 調査の結果

甕棺墓（第2図） 甕棺墓は、地表下約20cmであらわれ、茶褐色の礫混じり粘質土をさらに30cm掘り込んだ状態で検出した。ほぼ南北に主軸を置き、水平に埋設されていた。2つの甕型土器を使用し、北側の土器は完形のまま横位水平に置かれ、南側の土器は、おそらく埋設時に土器の口縁部から胴部にかけての一部を割って、これを北側の土器の口の部分にふたをするように立てかけ、残りの部分は、北側の土器の逆方向からほぼ半分をおおいかぶすような状態で置かれていた。底には支え石と思われる礫が見られた。

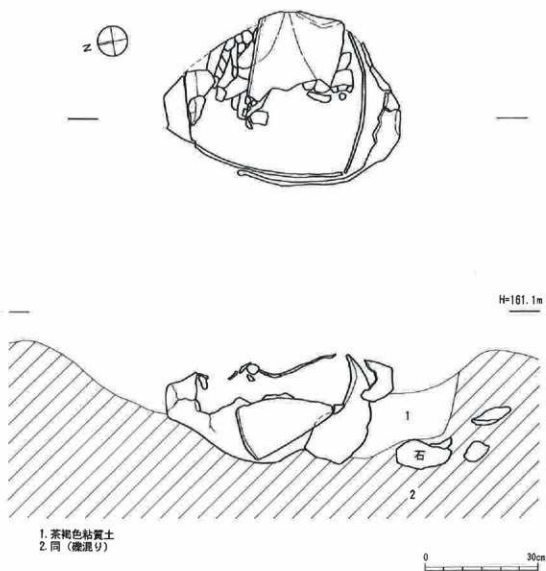
また、甕棺内の上を精査した結果、若干の炭を検出した。

縄文土器（第3図） 出土した土器は、甕棺として用いられていた2点と、若干量の他の個体の縄文土器片である。

1は、埋設の主体となっていた北側の土器で、口径約35cm、底径約9cm、高さ約42cmをはかる。形態は、やや張りのある胴部の上部でくびれ、外反する長い口縁部をもつ甕形土器である。平底の底部をもつ。口縁部直下に、上から押さえて整形した素文の凸帯を1条めぐらしている。土器の外表面は、頸部から凸帯にかけては櫛状工具による横方向のけずり調整、胴部については斜め方向の条痕を施している。内面はなでおよび削りによる調整が施されている。

2は、ふたとして利用されていた南側の土器で、口径約43cm、底径約7.5cm、高さ約41

cmをはかる。やや口の狭まる砲弾型をしている。凹底の底部をもつ。口縁部下に上下から押さえた1条の素文の凸帯をめくらせている。外面口縁部付近は横方向の条痕を施し、以下は斜め方向の条痕を施している。内面は、口縁部から胴部にかけては横方向に、以下は斜めに条痕を施す。



第2図 壺棺出土状況実測図

4. 杉沢遺跡出土の甕棺（まとめにかえて）

今回の調査の結果、杉沢遺跡における甕棺の埋設状況の一例が明らかになった。

杉沢遺跡では、今回の調査を含めて3回の小規模な調査が行われているが未だに全容解明にはほど遠い状況である。ここでは、調査のまとめにかえて、今日まで出土している甕棺を一度整理し、その特徴や埋設状況などを紹介したい。

杉沢遺跡では表1の通りこれまで少なくとも9組の甕棺が出土している。

このうち発掘調査で出土したものは、昭和13年の調査で出土した1・2号甕棺⁽⁴⁾昭和29年頃に不時発見され京都学芸大学が調査した8号棺⁽⁵⁾と、今回の9号棺の4組である。3号棺は京大調査の契機となったもので、昭和13年の新道工事の際に出土したものである。以下、4～7号棺については『改訂近江國坂田郡志』中の記載を参考にした⁽⁶⁾（4号棺については地図上の記載のみで詳細は不明である）。

9組の甕棺が出土したのは小字出晴および南川の一帯で、東西約100m、南北約120mの範囲内にあり、標高は約156m～160mである。地元研究者の藤田和彦氏によると、甕棺が集中するこのあたりは、まわりから見ると尾根状に少し高くなっていて乾いたところだということである。意識的にこのような土地を墓域（あるいは墓地を伴う集落）として選定

表1 杉沢遺跡出土甕棺一覧

(単位cm)

| No | 出土年月日 | 調査主体 | 出土地点 | 使用法 | 主軸方位 | 埋設位 | 深さ | 土器 | 口径 | 高さ | 底径 | 厚さ | 所在 |
|----|---------------|----------------|-------|--|-------------|------|-------|----------------------|----|-----|-----|-----|------------|
| 1号 | S13.4.2 ～3 | 京都大学 | 字出晴 | 合口棺 | 北東-南西 | 横位水平 | 81.8 | 東棺 | 31 | 35 | 4.5 | 1.3 | 長浜城 鹿博 |
| | | | | | | | | 西棺 | 33 | 41 | 4.0 | 1.3 | |
| 2号 | " | " | " | 合口棺 | 西北-東南 | 横位水平 | 81.8 | 南棺 | 30 | - | 7.5 | 1.3 | 不明 |
| | | | | | | | | 北棺 | 31 | - | 8.0 | 1.3 | |
| 3号 | S11.2.28 | 不時発見 | " | 単棺か 合口棺 | 東-西 | 横位 | - | 36 | 37 | 3.5 | 1.3 | 不明 | |
| 4号 | - | 不時発見か | " | *『改訂近江國坂田郡志』P149図に記載があるが、本文の記載がないため 詳細不明。県道工事中か | | | | | | | | | |
| 5号 | S15.8 | 不時発見 | 南川420 | 合口棺 | 西北-東南 | - | 51-54 | | | | | 0.5 | 不明 |
| 6号 | - | 不時発見 | 南川 | - | 西北-東南 | - | 51-54 | *第5～7号棺は同じ タイプの土器 | | | | 0.5 | 不明 |
| 7号 | - | 不時発見 | 南川419 | 合口棺 | 西北-東南 | | 60 | | | | | 0.6 | 不明 |
| 8号 | S29 | 不時発見・ 京都学芸大 | 南川416 | 合口棺 | 北北東- 南南西 | 横位 | 65-75 | *土器は1.2号棺と同じ タイプ | | | | | 消失 |
| 9号 | H7.1 | 不時発見・ 伊吹町教委 | 南川 | 合口棺 | 南-北 | 横位水平 | 50 | 北棺 | 35 | 42 | 9.0 | 0.8 | 町教委 で保管 |
| | | | | | | | | 南棺 | 43 | 42 | 7.5 | 0.8 | |

していたことが予想される。

甕棺は、いずれも礫混じりの灰（茶）褐色粘質土層を掘り込んでおり、地表下約50～80cmを底にして埋設されていた。甕棺の主軸の方位については、西北－東南が4組と最も多く何らかの意図を感じるが、北東－南西、東－西、北北東－南南西、南－北などがあり一概にはとらえられない。また、埋設位についてはすべて横位であったと推定される。

甕棺の形態には単棺・合蓋棺・合口棺などがあるが、杉沢遺跡では、調査で出土したものについてはすべて合口棺であり、その他、『郡志』記載の5・7号棺が合口棺としている（4・6号棺は不明）。3号棺については単棺の可能性が指摘されているが、2個体分の破片があり横位の状態で埋設されていたことから合口棺の可能性が高い。発掘調査で確認された1・2・8号棺は、いずれも2個の甕形土器を組み合わせ横位水平に埋設したもので、やや小さい方の口を大きい方の口に少し挿入している（写真1・2）。加えて1号棺のように合わせ目を別の破片で覆い、底部に支えの石を置くものがある。

今回調査をおこなった9号棺は、主体となる土器を横位に置き、もう一方の上器を埋設時に割ってふたとして立てかけ、残りの部分で覆いかぶすように置かれていた。この形態も一応合口棺と考えられるが、ふたを置くことは他の甕棺と様相を異にしている。

使用されている土器（第4図）は、1号棺東棺は口縁部が内傾した広口の粗製甕形土器で、小さい平底の底部をもつ。口縁部下に一条の刻み目凸帯をめぐらせ、体部には刷毛目状の条痕文がみられる。口径約31cm、底径約4.5cm、高さ約35cmを測る。西棺は、口縁が内傾しながら立ち上り端部でわずかに外反する広口の粗製甕形土器で、小さい平底の底部をもつ。口縁部下に一条の刻み目凸帯をめぐらせている。凸帯上の刻み目は二枚目による大振りの施文となっている。口径約33cm、底径約4cm、高さ約41cmを測る。甕棺結合部の覆いにもちいられていた土器は、口径約35cmほどで東棺と同じタイプの甕形土器である。2号棺南棺は頸部からくびれて立ち上がる広口粗製の甕形土器で口縁部下に刻み目凸帯をめぐらせている。中凹みの底部をもち、口径約30cm、底径約7.5cmを測る。北棺は、直立する口縁部下に刻み目凸帯をめぐらせている。中凹みの底部をもち、口径約31cm、底径約8cmを測る。3号棺は大きく外反する口縁の広口の粗製甕形土器で、小さい平底の底部をもつ。口縁部下に一条の刻み目凸帯をめぐらせている。口径約36cm、底径約3.5cm、高さ約37cmを測る。

8号棺については出土状況の写真（写真3・4）で判断するさきり、小さい平底の底部をもち口縁部が内傾した広口の粗製甕形土器である。口縁部下に一条の刻み目凸帯をめぐ

らせている。体部には刷毛目状の条痕あるいは磨き調整が施されている。土器の大きさについては1・2号棺とほぼ同じであったという。

さて、甕棺に使用された土器の所在については、京都大学が調査した1号棺は、長浜市立長浜城歴史博物館に寄託されているので実見できる。京都学芸大学調査の8号棺については、復元されたあと伊吹山三合目の郷土資料館に展示されていたが、昭和37年の火災のため焼失してしまった。2・3号棺については報告文中で実測図として確かめらるが、現物の所在は不明である。『郡志』記載の4～7号棺についても不明である。なお、4～7号棺については復元できるような出土状況ではなかったが、地元研究者である樋口元氏が実見したうえで合口甕棺と確認されたものと推定されている。

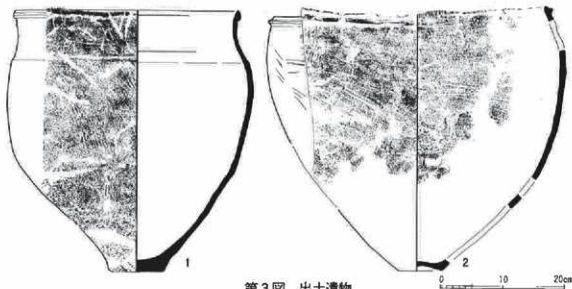
以上、杉沢遺跡の甕棺に利用されていた土器の概観を記したが、ほとんどの土器が一条凸帯の土器である点(2号棺については頸部がないため一条と判断できない)や、凸帯上の施文に二枚貝を使っているものがあることなど、東海系の特徴をもつ土器群であるといえる。具体的には、1号棺は愛知県一宮市馬見塚遺跡を標式とする典型的な馬見塚式土器に類似する土器で、9号棺南棺も1号棺西棺に近い土器である。9号棺北棺については大阪市長原遺跡を標式とする長原式土器に相当すると考えられるが、東海の影響を受けているかも知れない。また、個々の組み合わせにおいてもタイプの違うものが利用されていることが注目される。

合口甕棺は滋賀県北部や岐阜・福井両県を中心に現われ、三重県北部や愛知県西部、石川県南部に分布する葬法であり⁽⁷⁾、杉沢遺跡はこの分布圏の中心に位置している。また、甕棺に利用されている土器は東海系のもが主体となっており、関ヶ原からの峡谷部を通じて入ってきた東からの文化の影響を受けながら成立したと考えられる。

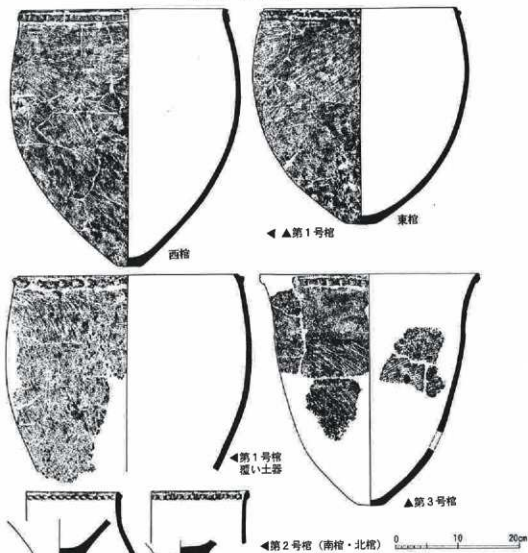
本項では、杉沢遺跡出土の甕棺について概略を紹介するにとどまったが、今後さらに検討を加えて杉沢遺跡の性格の一端にせまっていきたい。

〔註〕

- (1) 小林行雄ほか「近江坂田郡春照村杉澤遺跡」(『考古学』9-5 1938年)
- (2) 用田政晴「杉沢遺跡発掘調査概要報告書」(伊吹町教育委員会 1988年)
- (3) 高橋順之「伊吹町内遺跡発掘調査1」(伊吹町教育委員会 1992年)
- (4) 註1
- (5) 藤田和彦氏所蔵の写真が残っている。
- (6) 坂田郡教育会編『改訂近江國坂田郡志』第1巻 1941年
- (7) 中村健二「土器棺よりみた近畿地方縄文晩期後半の地域色について」(『滋賀考古』10 1993年)



第3図 出土遺物



第4図 昭和13年出土の墓棺

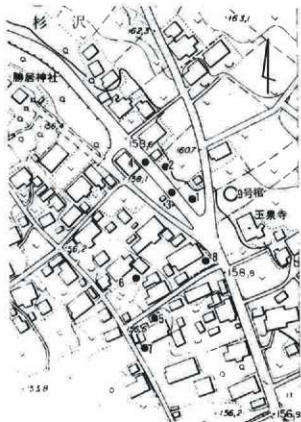
(小林行雄ほか「近江坂田郡春照村杉澤遺跡」より)



写真1 昭和13年壘棺出土状況（1号棺）



（上から）写真2 昭和29年壘棺出土状況（8号棺）
写真3・4 昭和29年出土した土器



第5図 壘棺出土分布図 (S=1/2500)

第2章 谷海道遺跡の調査

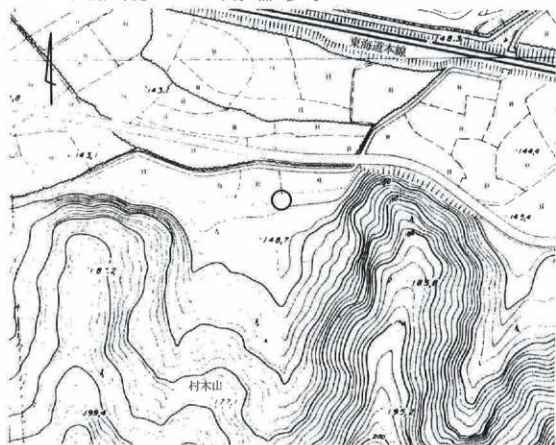
1. 遺跡の性格

谷海道遺跡のある村木地区は町域の最南端にあり、地区の中央を貫流する天野川と政所川との合流点を占める。

谷海道遺跡は、村木山の北側山麓に位置している。平成5年4月18日に町史編纂事業に伴う踏査中、ほ場整備事業で削りとられた法面で平安時代の遺物が採集されたことにより、周辺の地名をとって、「谷海道遺跡」として文化財保護法第57条の6第1項の規定に基づいて、文化庁に遺跡発見通知を提出した。

この一帯には、地元で「神の杉」と呼ばれている巨木や薬師堂あるいは寺院跡といわれている削平地があり、幅6m、長さ17.5m、高さ2m弱の盛り土遺構などを見ることがができる。また、過去に十数個のまとまった石や検皮、石仏などが見つかった⁽¹⁾。

しかし、遺跡の実態については不明な点が多い。



第6図 調査地位置図 (S=1/2500)

2. 調査の経過

今回の調査は、近年、周辺でほ場整備や農免道路の開設などの開発事業がおこなわれ、今後も開発の及ぶ可能性があることから、遺跡の性格を明らかにする目的で小規模な試掘調査としておこなった。

今回は、削平地に1ヵ所と盛り土遺構に2ヵ所の試掘トレンチを設定し、人力によって掘り下げながら、遺構や遺物の状況を確認した。現地調査は、平成7年3月6日から8日にかけておこなった。

3. 調査の結果

T1は、一番下の削平地の北西隅に設定した約3m四方のトレンチである。さきの盛り土遺構は、この削平地の西隅にほぼ南北方向に横たわっている。遺物が採集された法面に近く、遺物に伴う遺構の存在が予想された。表土は山側で深さ30cm、谷側で約20cmあり、これを剥くと、ほとんど礫を含まない赤褐色の粘質土が約35cmの深さで堆積していた。この層の中間より上の部分、地表面の約30～40cm下にあたるどころから灰釉陶器および土師器が出土している。この層を剥くと同色同質で、小礫を多く含む締まった土層になる。この面が遺構面かと考えたが、精査した結果、遺構は見られなかった。

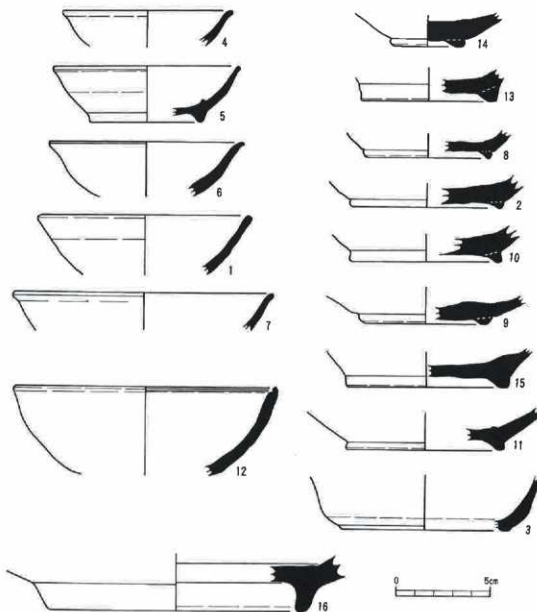
T2およびT3は盛り土遺構の性格を明らかにすることを目的に設定したトレンチである。T2は、盛り土遺構の長軸の中央北寄りに設定した幅1.5m、奥行き3.2mのトレンチである。約10cmの腐葉土を剥くと、赤褐色粘質土（1層）が表れる。その下が茶褐色粘質土（2層）で、この盛り土遺構は2層を芯に1層が包みかぶす状況であることがわかった。盛り土の頂部下約50cm付近の2層から土師器、須恵器、灰釉陶器が包含された状態で出土した。1層は周辺の軟質の山土であり、2層もさらさらと軟らかい土であった。T3は盛り土遺構の南端に設けたトレンチで、赤褐色粘質土（1層）が堆積していた。さらに掘り下げると、さらさらのお軟らかい赤褐色土となり灰釉陶器等が出土した。出土地点は周辺の地表面の約20cm下にあたる。

出土した土器のうち岡化できるものを図6に示した。出土したのは、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗で、平安時代初期から末期までの年代幅がみられるが、主な遺物から11世紀頃が中心と考えられる。

(1)(2)はT2の第1層中から出土した。(1)は灰釉陶器の碗で、(2)は盛り土遺構の頂点から出土した山茶碗である。(3)～(11)はT2の第2層からの出土で、(3)は

須恵器の坏で低い高台を持つ。(4)～(11)は灰釉陶器の碗で、このうち(4)～(6)は小碗で、(11)は比較的大きな碗である。(12)はT3の第1層から出土したもので、近江系黒色土器の碗である。(13)～(16)はT3の第2層の出土で、(16)は径13.6cm、高さ1.5cmの高台をもつ大型の器種である。

出土した灰釉陶器は、小振りでシャープな高台を持つものや、偏平で断面三角形の高台を持つ山茶碗系のもなどがある。



第7図 出土遺物実測図

4. まとめにかえて

以上、この削平地の地表下20～40cmに平安時代の遺物を包含する層が広がっていることが確認できた、今回は当該時期の遺構を検出できなかったが、今後の調査にゆだねたい。

また、塚あるいは土塁かと当初考えていた盛り上遺構は、叩き締めたような形跡や内部の遺構がみられず、整地に伴う盛り上である可能性が高く、含まれていた土器も、整地の際に混じったものと考えられる。

谷海道遺跡は、平安時代中期以降を中心とする遺跡であり、盛り土遺構もこの時代以降に、何らかの目的で整地された際に形成されたものであると考えられる。

今後、さらに周辺の遺構を網羅したこの地域の全体的な調査の必要性を痛感する。

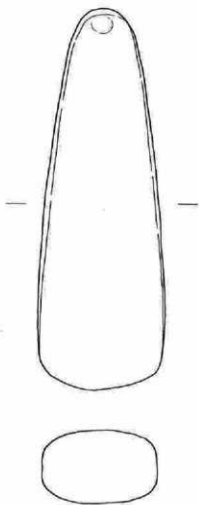
資料紹介 天野川採集の磨製石斧

平成6年、谷海道遺跡が所在する村木地区内の天野川において、川浚い作業中に磨製石斧が1点採集されたのでここで紹介する。⁽²⁾

長さ20.2cm、刃部の幅6.5cm、最大の厚さ3.8cm、重さ800gの大型磨製石斧である。

表面が全体に丸くなっておりローリングを受けていると考えられるので、もともと採集地点にあったものではなく、周辺から流入したものと思われる。

村木地区内では過去にも縄文時代と考えられる石斧が採集されている（村木遺跡）。また、隣接して縄文時代晩期の杉沢遺跡があり、天野川上流には縄文時代中期の番の面遺跡（山東町）があることから、これらのいずれかに関連するものと考えられる。



第8図 石斧実測図

〔註〕

- (1) 川瀬春益『ふるさと村木のあゆみ』1993年
- (2) 植崎貞造氏のご好意により実見した。

圖 版



調査地風景



調査風景



墓棺出土状況（上から）



墓棺出土状況（横から）



妻棺出土状況（中の土を除いた後）



出土遺物



調査地遠景



調査地より伊吹山を望む



調査風景



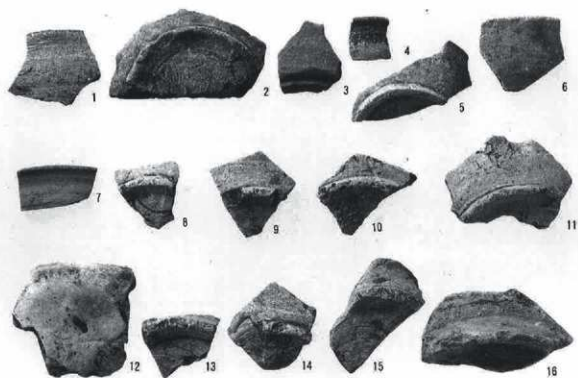
トレンチ 1



トレンチ 2



トレンチ 3



出土遺物



採集石斧

伊吹町文化財調査報告書第10集
杉沢遺跡雙棺墓の調査・谷海道遺跡

—伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ—

1996年 3月

編集・発行 伊吹町教育委員会
滋賀県坂田郡伊吹町香取37

印刷 壺井日之出印刷

報告書抄録

| ふりがな | すぎさかいせきかめかんだのちゆうき・たにかいどういせき | | | | | | | |
|--------------------|---|-------------|--------|-------------------------|--------------------|-----------------------|-----------|--------------------|
| 書名 | 杉沢遺跡甕棺墓の調査・谷海道遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 伊吹町内遺跡発掘調査 | | | | | | | |
| 巻次 | Ⅲ | | | | | | | |
| シリーズ名 | 伊吹町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第10集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 高橋順之 | | | | | | | |
| 編集機関 | 伊吹町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒521-03 滋賀県坂田郡伊吹町奉照37 TEL 0749-58-1121 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1996年3月 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| すぎさかいせき 杉沢遺跡 | しがらびん さかたぐん 滋賀県坂田郡 いぶきまちようせき 伊吹町杉沢 | 254622 | 44 | 35度 22分 0秒 | 136度 23分 25秒 | 19950110 ~19950118 | 4 | 農作業に 伴う調査 |
| たにかいどういせき 谷海道遺跡 | いぶきまちようむらび 伊吹町村木 | 254622 | 70 | 35度 21分 30秒 | 136度 23分 15秒 | 19950306 ~19950308 | 14 | 範囲確認 のための調 査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 杉沢遺跡 | 畑地 | 縄文時代 晩期 | 合口甕棺1基 | 縄文土器 | | | | |
| 谷海道遺跡 | 山林 | 平安時代 初~末 | 盛土遺構 | 土師器、須恵器 灰釉陶器、山茶 碗 | | | | |

